



この題簽、中村俊定先生より預戴す

俳
歸
詠
表
紙

坤

秋

市ら彼満はく秋を志不日
く或舛れ波不録のは流南
秋多一日の雫多し芥の朝
むし海を不家子録の川
朝日や朝の海笑婦夢のち

其
鳥
志
楚
其
明
光
流
川
明



蘇れはちん八折んきおひの好
旅人や釣うふの花見て通ふ
鮎魚子負形ふき成あき
脊片子極 相の安る初嵐
就中 自秋のいそ一葉の南
鮎六子 蘇 桐の葉のまき小
す院子あきつてつゝかふ
楠 木 山 下
ふふささやきかきささささ

夢夜 深風 雪川 又玄 玉燵 夢語 具明 芦風

星れはちん八折んきおひの好
旅人や釣うふの花見て通ふ
鮎魚子負形ふき成あき
脊片子極 相の安る初嵐
就中 自秋のいそ一葉の南
鮎六子 蘇 桐の葉のまき小
す院子あきつてつゝかふ
楠 木 山 下
ふふささやきかきささささ

鳥光 踏風 夢語 如貴 左文 梅子 片芦 志々院 波文

いとけね妻なりし祖母子育せりて人
おとす一乃年月西域にまをりてちよ乃
慈恩子はさまりて鬼むふ不出るあり
祖母のうへに子ひさまつき侍りて

父母乃ふ身形にり魂系
多了系小細流々をふし見ん
竟極やゆくふ化も志不むき
極経おをましまれぬ不麻衣
たすの娘や母の位はしけい々皆
稲つまやうはつくの鶴の歌

其明 其雲 孤有 梨山 楚川 此踏

いふつ月お當は志ま武夜の電
とくは父和津子更し虫の啼
秘まらざる夜のおこの子をいふき
階燈の志もつさぬ家何し
あうかや子鈴日さきく秋乃際
き〜夜のおをさる夜お隠障
寂寥多ふ不御地
まり〜さや啼わおそのあつす
喚聲お深海雲のあうち系

義仲 孤有 楚川 左文 曲城 鳥光 其明 眠紅

花はさかみまきてし春のまかりけ
檜木のもしよふらうきく交の南
くまうてよふさか木橋のしりかふ
朝の勢おまがたまきしちふけ
陽光の人もまきく木橋の那
鶴既の言をまきししゆをふ
白くまきく山麓を消ゆ
あゝ秋やちもひくし袖の影

魚の
芦笋
鳥光
夢河
持川
耳涼
左文
其明
明二

あゝ秋やちもひくし袖の影
あましくしきまきく大木は
糸阿のわさしつる我角力
ハ部や縄のまきくまのねを交
山阿の板中しやわきくま
くまきく山麓のまきくま
白くまきく山麓のまきくま
龍阿のまきく山麓のまきくま
山阿のまきく山麓のまきくま

夢語
眠紅
祖明
其明
踏風
菱花
其明
其明
映鷺

暮くも秋の白く去る櫓小
いよ川系やぬるかしの秋の風
京中や人まきくも阿武乃風
敵今や小里むくわよ秋の風

左 咲
具 明
甫 柳
鳥 如

詣 粟津 墓

いししよのそとにけりふり
意元禄のあり蕉風のありて
まきまき不國の一呼元禄のありし

さり来も墓の秋風きく日
音を好里いりしは花は支那の夢

志 乃 庵
花 由

秋凡や櫓阿きく暮乃くも
明くもぬきゆる人乃画の南
明月の野末は紫の庵、有
名くや居安つふ小軒ふのまき
このあ志をくく石をゆるく
明くや能見なくく山やき

秋 白
眠 紅
此 踏
楚 川
曲 城
春 池

松崎 良辰

松の川松しほの月夜はるる

志 乃 庵

異羽行季のうなち集もよひ
何里しつちま一ちをの

阿の鷹の付南くちあぢ月影の南
まの象や紫舟子志をわもる

左 嘯
踏 風

七旅人友なきも子望のけねと
志して曉臺のいなきまかまら
祿し有明山に入新を嘆きゆく
奥をくらやつくまらなり道のわ
いつまに里いりてまらなり
崖上よりなきは月を一時み
きく桂子あふふ松風の松風
いぬく文なり

かしの里を姨とて山のこの歌
月とをわ姨推冥くまはり

左 嘯
夜 泣

明るわ仲の中形ふまれけ
放生會け日の濱を何をまら
をけけの仲まはれく見ゆふ
旅船子志をく薬のつまは
鳴とらして多き白那ふ何系け
まらをほお先ゆ後子死の声
朝風や城をみきりまらの花
花の芦の室をのまら衣つ
中居まはれぬくまらつ石水

同
其 明
左 嘆
踏 山
楚 川
具 明
左 嘆
深 風

くらあきや何となく秋子啼き
秋の野山風ぬくまもかきふ也

翠踏
左嚙

父乃身はよりいぬ麻ふま先
未をより見ふまきの子にまきり

悔ふ者く日ほしませまふ跡北空
長さを相女つぬやく壁
白乃何れも一僕つきてきのこ持
蘭いし川獲てし声ぬつふきうふ
あゝ水康啼秋くふ里より
かゝりつきて康のも泣きをきく秋

眠紅
踏風
五烟
曲城
椽秋
其明

秋毫亭子阿そいつまつ文ねふり
秋のや康啼秋の秋乃と
秋のや康啼秋の秋乃と
秋のや康啼秋の秋乃と

眠紅
鳥光
妾語

秋毫亭子阿そいつまつ文ねふり
秋のや康啼秋の秋乃と
秋のや康啼秋の秋乃と
秋のや康啼秋の秋乃と

鳥光

くまうーうあまは波ふ葉紅葉

其明

九月九日在二子山を賦ふ

きくのを帰飯多目と云ふ山路は
き子九日志る菊株し風里きり
申多えし人よを遊せりまくのき子
尋乃其の夫人我より組やき
る好く秋松志くく秋中ノ菊
のちの月宇多の帝を羨むし

志々庵
其物
楚川
振面
麦語
志々庵

岐嶽の横道 志子室山 志々庵
乃くまてきたと云ふちももつあさは
ゆきよ人の醜教ふとねふき秋多し

紅葉して七みちふと其の赤の秋
秋のくま伏屋の留書も六もりや
秋乃暮門子あつあふかきわりし
日のい流や蓬かう秋のく秋
ゆ秋や何をちうる子 志
ゆ秋子見くく山望のきありし
川録や星を穂垣に風出をく
くまてゆ録や媒鳥代りし志

志々庵
其物
楚川
振面
麦語
志々庵

冬

志くあや白膠木の皮を執るふ不
あぐ板や象十をり時ふふ不
馨たふふを隣はくまの南
志くあやわわくわあ志めふ音
日かせたく六張象ち里こむ急乃麦

眠紅
此踏
麦色
五烟
其明

門あひ美歌柳のけし木を南
まきしわ道を地手木のまふ不
麻屋してやさる見はく小城小
子のおも木の美ちふさく儀の声
美ふくれ大根造ふいさか南
昔乃粒の中子麦まく男々那
小春くき時局せ好日の地山小
瑞籬や地味の国ふき神のるや
ふふ了思やふあ勢時鐘の声

振白
習谷
片芦
楚川
此踏
同
亦諸
其明

源つゝ執家子とほりきり夷海
魚乃骨心しゝき世乃惠比良
菊つゝ里々人仙をさし〜いん
水仙乃昔焦〜多不疾燭の南
葉此表子ふをしりて身軽日あ
十月乃極つ不ぬふ未即か那
山茶花の咲きり梅をよ〜いぬ
冬の陣雪一時乃き不いの南
く〜花日中のつしりあふ也

南鳥
鳥光
斗涼
眠紅
楚川
志々庵
鳥光
斗南
同

仰つゝも形〜や明家の帰表
野一羽多つゝ水明乃〜くの南
健尔〜もあき〜き〜小鶴小
松暮て水多進志入江かふ
水鳥乃や〜〜婦は乃〜も〜麻子
阿〜孫やち〜り〜る〜き〜使か〜ら
磯古わか〜り〜舞入〜まあ〜し
を留松よきあふ〜り〜り〜流子多
磯やあ〜も〜ねや又実きち〜も子多

具明
李井
雪浦
片芦
星巴
其明
鳥光
踏風
楚川

みろきる志きり子啼て暮尔きり
梅乃木尔雀啼あり其のくま

夢語
其明

山嵐せぬくも形きりしこみり
秋風より子泣して眼たをばくふ
をく先 驚驚鳴て我去ふのち
雀啼て好く子かく不目とまはく
くまてあめ形一ニ士う白いつまはる
ふく

何し此世の子を免れきりしみきり
冬籠ぬ、ふまて結のちつり
冬末も里籠ちものふいり南
をつかま交交れみりわ冬末也

高々院
眠紅
碩布
批る

時守やふるきりし依り冬末も孝
冬籠に里ぬくとを防いし
わく子子袴くまきり冬こもり

冬邑
珍噴
其明

母乃病床いとせたり子おまつ
のくちちまを佛してを飛まはた
つくま多ふ孝子いふてあはれ
あくさえくまはる

冬末もきりこの冬あふ暮見せ
冬の月ふし 遠空のあきつ里
冬月まきり自のりふ大橋ふ
森子瀬のつさふふをな

冬語
左噴
踏習
竹翠

彼きとや大まふ河豚の換し何ふ
 好くけし蘭乃若者おしはる
 六より此もなれ侍あす外
 風戸崎何系伸のまふ支
 こか舞しや衣乃袖をふ里り
 風子松明きえし世申は
 つまひし松舞をまき日し
 冬のみしあまふ声北山まふ
 冬乃ぬやいふ妻如の系車
 如貴
 笛大
 禹川
 伏龜
 盤水
 其明
 鳥光
 夢語
 自来

之尺乃劔研辰不寔ぬの南
 其不曇ハ吉人の鶴れ空うな
 世の石乃親の何ぬの世は傳交
 雲並しかき舛の骨あハぬ里
 わ里ぬわぬあまの親のまふ川
 花の世 盤石の女や志も柱
 父の七面ははるの馬碑の石髪を
 そきつ具一かふふ才や守そ中まハ
 父の面をとうぬけしぬくまふ家とや
 まふの面をいぬくも後睡ははまふ
 親るや才もる 髪の長
 此路
 其明
 孤有
 夢語
 研石
 翠運
 花御

換子ももはまきせてありし夜のとほ
つふ夜半子尾長啼し朝のくま
をちうい子琴をたる夜ふこふゆ
岩のそふ青い玉焼くこいより
日室中の櫓のふ灰つとふなる
不為のなや文おきてこれ大い夜に
桐を桶人子かきてしおるの形
岩電や日くまの山おほ
ま〜 繞るゆりて見ふきありし

わろ
南鳥
踏習
駒跡
麦詠
斗南
其明
映鷺
鳥光

くらき夜にありぬまふ浮木は
おもをせし隙にまらぬし
いさふ東海のつもり雪はくま
をつ雪おきのふれ津もふ農色
関此戸をしくわきを搔ちう
みのかさやゆきを見ふも雪は暮
かうさくを何とせし隙にふ
はまきてし亦乃敷を夜のを
ちう道おこりての〜をりうゆ

其明
麦語
此踏
玉燈
義仲
さち
其明
志乃庵
蓬宇

道多ゆえ 小田丸を運ぶ唐船
 松風の阿比志をこらむ口を此の時
 猿抱てあつた中居不庵の南
 こも里居て凍不青きく深田小
 明星や凍めくあつた岨乃鹿
ぬりくふ不城基子
 まめふりくさきとおひ
 月雪の海口の此の城のかき
 切もぬくあつた歩走くあつた利
 同 楚川 其期 中報 杖布 巳仲
 楚粟

四時混雜

ぬりの奥子やうしと
 まめふりくさきとおひ
 友とちのうらみあり

江乃能何子かき了る月夜の有
 深き武寸屋根の小字北落あり
 茶農去かき了るくまの川
 ふやまやまきさき目子川
 一寺屋のつねにけ利春乃風
 日ありや悚しつる深美い流
 夫代 踏因 楚粟 渭川

かすかしてき雀の声をきく響が
たよりやまりありぬ不教乃音
る乃る不教をりまきふ不教字
大空、農をいぬ隙のちつや
朝か不おきの婦と長乃教おは
まきぬわたくしこのうをふ不中道
不路鳥をきまといふるに中まきふ
ぬわれつ不まにま不まの麻
あやふやうく何ふくぬたや

星白
雲瑞
鐘三
し古
川
紫る

此樂やほとね武不きの咲と流
飛羽翠が雀田北小橋乃くつまは
端娘乃白あひぬふ中あなふ
くまぬふ燃ふ貫た象とをん
甘刺はくわはあまをぬち何り
川ぬまやたふぬまく不鳴ちり
口の雀て走本のい流かふりま字
たより不ぬはく音も交ふ形り
田つ武や流をたせし陣なく

鳥奴
、
、
、
、
雀
、
、
松吟
、
其の
兔耳

口の舛や鶴見糸虫 那まは度き
鷹木不子曉 潮子くつ流きり
何汁桶子批のちふ日北去つゝ也
月こ不不糸半のち也 乃おち木小
響やふさ糸つり子人乃家
出つ或所免ぬそこれ時に又隠ぬ
ゆの雲の櫓きやういこの不り
さく電子回 瘦ぬ不男の形
花椿り婦きぬ糸を見さやけん

、 簾 白
、 麦 白
、 芥 白
、 菜 婦
、 葱 白

水乃雪いぬくぬあ 酒 瓶
藤のく(をふ魚片ふ月糸の南
ぬそわをぬ舟向並ふくくの走
戸の何きくく暮ぬを春乃雪
舛ぬうく法水子向て駒北声
ふ乃花子鶴去つ糸不豆宵ふ
汲木不きゆ乃乾きわを流の風
をつ撮る川出くくを山路の菊
くまちく糸徒織ぬ糸のぬのふ

、 百 己
、 風 日
、 三 白
、 糸 石
、 糸 玉
、 丸 子
、 走 人 女

ふらふらわね鶴持さき見りかき
山位をきくぬもとの花はくり
響のつゆさう款ものとかふ不
機見ん松乃をぬ折さうん
陵や暮不日あ子のこね雪
長夫の日はいははしの鏡とつ成好り
袖ぬき春乃小ふや長暇
ふふし子共袖や古争の古さう
帰成ゆ乃小松ふかく籠きり

素風 白足 東戸 柯亭 如明 雲古 月尚 小回 大馬

苗代 糸小屋をわきまら火口皆あ
をたふしあや免俗さ恒根の南
か日向青や深衣乃新う古不
其の妙は武て水共ゆねおる形
山くをきまして里きしあなかふ
古とちより遠いと旅子さうめゆふ
岩あきて浦共さやの涼の南
右株をか成りを見まは共歌か歌
いすい日機さうんちき新子

八幡 箕山 五泉
中邑 鳥圃
徳間 佳夕
柏尾 鳥布
和夕 二

笛乃青如地賦子春の眠り外
隱癖一採子何を糸巻中
夢をくくや楮遊不中をなまき
去厚いか里か形一丈小貝いらをや
ぬつく急子ゆく遠里きぬくあふ
ふまかぬおきぬけぬ不有乃秋
山のきや山嵐も免て椿出く
汲夫不きくち井子表乃日比く
庵の戸や山田乃鹿の啼荒き

十一
七

稻山 冬翠
法幣川 珉川
丹皮嶋 野曉
一 瞬
百和
寸雪
沙延
蒙山

鹿乃声やて床き枕り
園此水や坪のちか乾ふ椿
かぬのまし乃尾もきき春日小
吹をらふ焼巻の何より巖り形
巻る本糸乃白いや燃高の時何より
暮ちうく何れましき曇ふいふ本
七種やつくく松乃葉もきき
秋山や枝もい切ぬ不徳の声
一をいふくねくありあふ乃空

北水 鍾
下 絶
尾 合
善光寺 野 笛
押田 桂 魚
年礼 東 水
文 夕
溜 中

ま〜〜雀をかゝるやせの鳴
音く〜やか田子〜川を麻の啼
供子や玉思四乃音も水清
目の光〜水〜流や芦花折る音
ま〜か浦の美多り折支〜も来れ
何れ〜細〜つ〜の是〜書〜南
旅人の下〜ふ〜れ地乃一里の形
了ま〜ふや松のい〜る〜成〜の魚
ぬふ〜ま〜小藪を〜して〜鮎〜ふ

別所
至鳥

青羊

批舟

大露

文鳥

冷馬

ま〜乃鈴黒馬〜こ〜い〜きれ
大〜に一衣をぬ〜と〜あ〜る
い〜休農〜あ〜不〜あ〜日中
風〜して〜鶴〜啼〜月〜の堤〜の南
巢乃鳥〜れ〜我〜を〜し〜雨〜去〜く
松〜去〜り〜て〜松〜乃〜鳥〜を〜流〜れ〜水
紫乃戸〜や〜宵〜折〜く〜白〜不〜梅〜の〜花
何〜様〜子〜あ〜ら〜山〜や〜梅〜ち〜不
井〜此〜か〜己〜の〜木〜糸〜や〜嘆〜ま〜お〜矢〜の〜是

吟雨

鳳玉

双魚

壺

批溪

菩提

細くちる陽空も七ゆふ春日の南
まのつ巡禮いぬをたぐりて
批はくありりて嘆て大星
死生よと食とて叶世を是るん
高芽や秋もを統のいふの廉
不依く山鳥の啼くしき
いふ林や大竹系乃落みより
戸啼や松も細くぬくか季
水子馬のり響かぬ乃くあり

根津修
尾山
又松
上田
麥二
半古
玉馬
踏紅

春松や人なくさむふ下が春
いふもりも松のほもる寒の南
ゆへに乃神やわめくしよしき
終にや佳歌も細をくち入不
春風もふ鷹もいぬふ好く
時多啼きてし松乃い木の前
名もわししとまを松の松の
山ぬく見き好松乃春嵐
松海に戸のわく春やをまむ

眉英
已百
松梢
玉桂
如鏡
和雪
葉菫
白石

藪いり乃を駢前して冊紙に
出さしよりまきりて春をさうり
長閑きや走乃出てゆく一歩
傳はぬ日暮の光のり之月而
春秋月馬上さうり物か
口の縁して障子はも見ゆ
秋乃花ふをほめて咲き
庭乃雪を白くをたぬふ
ひもこの松ぬるく

子茶

芳洲

雪架下

井々

松架

中よりわん歌ふ松のつぎ美
響はたたく見しきり年
層雪や何をぬくみき
空宮や雀音を啼石
春を就や去儀よりつく
六月も山鳥の花を
そのゆり山端や戸
以ふかほり蓮臺か
くらき音やぬも

具井

子石

露井

五声

坐井

之札

鹿

あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘

争茂
柳借
言珠
志け女
二芳
生羽
如毛

好まぬ柱かきまけ人ゆりし
松のまきまけかきまけ人ゆりし
いさゝかきまけかきまけ人ゆりし
くねつりに井をいさゝかきまけ人ゆりし
隠癖鳥府乃中子かきまけ人ゆりし
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘
あまのこちねつりかまよ小傘

雲帯
悟先

羅衣益人のつらく武世の難
山崎川越障乃しく武の南
かんここの常やまの女持居る所
いふ形うやこまきつて麻乃ゆく
まのくま境とらふまの
くらを著るめん乃回極小
くまの鹿の習習やこまのめふ
山もや樞おぬやまのの戸
谷乃まを人にも事辨時を

、 葉 洞

、 右 常

、 來 子

朝 紀 や 戸 匠 走 八 世 の 大 海 北
まのつれぬをのゝ居ふ山田外
鷲鳥農 我 常 深 してゆく
不 つ り と 遠 山 極 笑 子 乃 乃
くまの走しわ船もわめてし
秋 大 ち し 深 乃 白 いや 地 兼 采 又
紅 葉 見 や 忌 子 定 を 林 公 羽 達
風 子 向 し ぬ かく 鴨 の つ 走 小

、 志 仙

、 朴 之

、 斗 石

、 左 十

、 風 子

以六見聞并文通

人高好方音皆や庵のいき大根
夫より牧ういふ何をかまき馬
雪北野雪ふかひの針をかまき
高裾子帝女連ふ川志くまき
白乃後賣く男ふかき能のこ
高振子高遠くして牡丹代

江戸
門懸
尺五
鼓水
廿日坊
葵太

梅のやをき見まはまは二三十
庭掃てふの庭葉をかき免り
菊ぬしこ咲日もちう交梅の南
紫や樵を木の中を人うゆく
つ乃雪塵もぬもふり毛利
舟舟きまふ船きまふ不時白小
床啼や萩乃道北おろつう家
う一里花化ぬしこ旅感まうくまき
まうくまき子場登るまきいふ水

冬英
夜庭
書格
平居
糴田
鷗崇
眞田
東武
柳儿
文郷
抵白
巨計

ぬまてゆき暮はたらくおる乃陣
 春の風屑屋も見ゆふ何なり
 道乃色やあつあつこの木のかき
 鹿やの川に枝よりあまをとも免危
 つる農あつた唐木子数味
 松を虫のくらふ青きく是のたれ
 おをいぬ或空乃鳴や門さく
 偏幅や扇のたつまの捲くるま
 ありし心や匠く子曼殊河を

下總千葉 普成
寺傍 古跡
僧 傲天
寒川 大虚
 素行
 梅後
 晴波
我聖 桑戸
 兔石

ゆきまじり西風をけし遠子小
 白此日の塵ちあつく中よつ息く
 けりあましや弟く新徳の志のふ仲
 いら中の小る子いら尾花小
 杜宇のあのこのあのあのあの
 ちまきく庚申塚乃椿かま
 川志もやたらくのふの里の鴨の舞
 何となく桜桐の日はや秋乃風
 まをりていりる野のゆふをふ

眉尺
溪聖 徐舟
龍子 鳥歌
 百井
 四光
 胡笠
上總東金 鳥朝
 白林
 主梅

田圃
 已井
 有隣
 風
 月
 平
 和榮
 斧仙
 春
 見
 新
 丹
 春
 見
 新
 丹

山
 鹿
 聖
 仙
 長
 風
 偏
 玉
 英

古

出て見ても世にぬる山極
 庭掃て秋多しを覺きり
 魂極子さし武の乃新の形
 疾多遠くをわたりは月
 紫北戸子多えくぬき家
 花はゆきけりか里
 のまし腫接ぬきをさ日の入る
 夢や誰さる世し脊戸の松
 尾を何きては吸ふ雛子
 一青

下三

尾休

醉石

登倉

松柯

鳥黒

扇

山之

養鳥

一青

魚吹乃大くか里里吹乃空
 月何く極も不ぬゆるさ
 涼文てゆか里の極庵の那
 蒼もわたりて木乃志つか
 ちふ木の葉福を人のもも
 梅きや花のぬいし家寒
 菊細やいう子さくま
 藤の香はあはるる
 梅の葉も障子いし

秋中

任由

馬大

見風

交琴

吉良

巨井

素園

仰仙

梨一

食はめておろし 飯多ふとん 一平の家 江戸勝所 智九
 ちふ木の葉 中子ちきま 蔓も有 京 蝶夢
 瓢負ふ牛志 つらね王つらね 杉 大坂 桑尾
 阿をいぢく伊洗の浦人 春さけ 大坂 旧國
 いよりちふ極 まきこむく 貴小 泉明
 子子ぬのゆねとをぶく 汐子小 泉州樓 東楚
 一日冬 不化も書生も志見ぬ 播州三好 吳逸
 雁乃つらつきて 春の海寒し 但馬 布舟
 ふとを達を麻く 花の世帯小 玉柳

山ぬまやよりのふとのをぬれ 春 安藤彦成 風律
 つくつくまきまは 秋乃 蟬 紀伊長崎 玲堂
 ちふ家子 露くつふ月 秋の音 上室古
 ふ皮や 踏乃つらぬ 風乃 秋 伊豫松坂 吳扇
 のちれ月も 世の八乃 中しきり 倉波
 酒のまき 秋のまき 衣のつ 芥踏
 きのぬるふ 露も 不寒をきし 柳如系
 かんこ 雪 啼き けふ 子 大ぬる 高香
 見おれ せを 星 舟の 舟 子 屑 舟 坐 松

六し多ふや法ぬくもとの地はさく
 表乃鈴菜を澤山豊原もらひり
 松原野のくさき見つくるり
 西山
 白風をせいの花のお花ぬき
 免菜
 老乃花らしき教ては採り
 泉石
 傾城乃秋の藤くわちふ一葉
 翠溪
 是をわやく水桶子啼わす
 度雪
 志つさわせよ義の月よ暮去
 子得
 鈴乃申子門掃男か那
 相白

麻乃子を料をふふふふふ
 松舟
 家かきの夫やうぬ不根存つ
 吟山
 明乃六時を維子れ啼り
 也右
 春の神や忍藤て居ふ一乃教
 八亀
 老さあし名護屋聲子さきし休ぬ人
 鳥奏
 冬川や真の何きゆ鴨の羽
 曉臺
 山解の母まふりあ代室
 山父
 鳴乃子乃氣代あは里秋乃鳥
 孫朴

い旅く此世をのまふ不世の初
 友あり男人もまふ新玉煙の如
 保くまふと曉王んも棟かまふ
 木の芽保中道ゆくの裸脊馬
 春を待虚舟寤し鳥此真
 睡言く夫婦楮く川急この如
 ものいをして保く居不男か糸
 如良花ふまを於交地處小
 口の村の地句の牛も好くまふ不

信松代
 祇東
 全丁
 眠花
 猿左
 文兆
 百里
 雞山
 守一
 秋五

と武柳新乃玉水出るい老り
 牛乃脊をぬまて批を手に抄き季
 初汐や苔屋乃秋子人竹声
 こ不世解し川と二瀬子波を利
 怪刑啼や椎乃檀より白京
 仰向を改名つり於里叶鳥
 不くまふ抄ぬ 既も志つる形里
 明くまふ本の宿を形多深山小
 了はしけり巻書子れをまふし

小布施 杜風
坂山 白鳥
上田 祖鏡
松本 雲浪
上毛沼田 大治
岩村田 雞山
浮勝山田 入楚
川安 杜什
 浮石

川秀や人子も何を言ふ能く知らず
 梅乃花 松坂 梅輦
 多し川秋乃日しき 庚州仙臺 菊史
 新鷄や軒声何ふ春乃日 白石 大芝
 秋川や時男子候 本立 麦羅
 好多里居てもいも男暮や虫の声 上州沼田 如就
 常木や妙あ 上州沼田 如就
 門 上州沼田 如就
 志く新や大根提 上州沼田 山法師 鳥孝

然る目多 三向 魚釜
 松と流き男朝の多 甲州初時 秋舟
 此何多里休の中 相中用田 双鯉
 空に此 厚本 梅明
 椿 厚本 梅明
 山路 厚本 梅明
 かん 厚本 梅明
 山 厚本 梅明
 夫 厚本 梅明

大古や鶴鶴を望し 椽の先
番代乃ほのうもゆふ日和の南
花のもよ子鬢かき撫ふ如かた
外椽子藤し見んよの暑の南
うちらりて風のふふれり能る
山乃井の齒乃葉乃葉乃風葉
古柳子まぬうき女乃ゆきての南
椽花松打しもはくか
明るよよのいも人よのり

俱水 阿 春 江 雪 明 路 紫 雪 大 湯 花 匠

明るよ子志州て古きや純き
帰るつくと見ま六走本形里
傳山子見まきり細乃水仙花
起き走しやれぬ乃雪見ふき
乾きま交田井子ぬ乃か不也
大乃こ旅のる子春志不山家小
ぬて珍や媚ぬる免のま仕
まろくを啼やぬぬ乃上子履
明るよ志向ふ不なき漬法殿

泉之 吳川 西味 江左 魚洞 金梭 連城 松系 全奴

むくをゆくやぬ里御向を核擗
荷いゆく夢の縁はわ油かき
暮のふかつた山乃志はし
梅乃志見とつ母乃くけり不
かきぬいへぬしちまきり二系麦
表柳を枝をあらさぬはれん小

四時文通

春きしや柳子かき不續れ声
擗乃事不のゆしぬ不夏時の南

曾城

乙也

暮系

木の女

批魚

百卉

百明

曇もも長夜ぬの母 存る
獲秋葉子冬の雪は海をうね
雪のわいさふし辰家をうかむ
くく乃雪那のけりさ戸をかくりり
大空や肩代水乃流口ぬふ
荒川底に百合はもよのき雪小
くすくすはくくし何と啼
山花のたふ笑ては舞りり
乃小田を印唱はく新のた和

字石

伊勢松原
斗雲

信戸倉
古原

一方を州城までして夜更に
おもての之れをちまき秋の
ゆきの赤の葉梅はるるかきり
とらふれを云より小田乃晴
る大を以て終り地道をまゐり
くくおまの志をく来時小庭に
ねとぬいお一声高我風の噂
くき雲や恨梅系れぬお暑
ゆき雪子多ゆき秋のゆき

下伝、
大牛
松原老人

ふくらま感乃一冊松原先生のつゝわく
形用よりおまぬいゆ成ぬおと日空ぬ
産月中をとんを(ふ)むつくおまぬいゆ
道蕉公羽農ゆきてさあまのゆちくおの
いさこ子姨きて山形秋のるるつらふに
比すゆき(か)子お薬世の禪法あるを
きむこれ枕表のゆき師の暮接子

後天

かきふたうぢすすよとせうほくふちのきり
つちねくこくね家名 感表風乃くは
その志ふ川元まかきてたかきふたふ祿のい
素更りく名をもとめふは名何とてくは
ぬるこの名をぬく系風種のみ里才元
くこるおふいり歡まさきりまうぬあるを
おもつたふくおのち母ぬのちくしてくは
いふたつあす

志く院坊

書肆

江戸本石所十軒店
植村藤三郎
東寺所二條上所
橋屋治兵衛

